

「互いに重荷を担い合いなさい」（ガラ 6:1～10）

1 節の「“霊”に導かれて生きている」の直訳は「霊の人」です。1～2 節で、パウロはガラテヤの教会の人たちに、「霊の人であるから、誰かが罪に陥ったならば、その人を柔和な心で元に戻し、隣人愛によって互いに仕えなさい」と言っています。重荷とは何でしょうか。重荷は既に霊の人でありながら、まだ霊の人ではないという、キリスト者の罪や誘惑を含む不完全さや弱さを意味すると思われます。また、「担う」とは、2 節後半の言葉、隣人愛の奉仕から見れば、相手が自分に負わせるものを耐え忍ぶということよりも、相手が負って苦しんでいるものを一緒に担うという積極的な意味です。私たちの重荷は、私たちが負うべきものであり、イエスが負わなければならないものではありません。しかしイエスはありのままの私たちを愛を持って受け入れ、私たちの重荷を担ってくれます。このイエスのもとの、イエスに教えられ導かれ、イエスに力づけられながら、私たちもお互いに重荷を担い合うことができるようになるのです。その時、重荷は軽くなるのです。それは、神さまが私たちの痛みを知り、共にいてくださるからです。人は各人が自分の責任を果たすことを考えるべきであって、他人と比べて、誇ったり軽蔑したりしてはならないのです。

7 節後半～9 節で、人間の行為とその招く結果が、種まきの例、「種を蒔く一実を刈り取る」という一對の表象で言い表されます。互いに重荷を担うとは、神さまの裁きの時がくれば、実るといふ達成点があるということであり、パウロは、「今、私たちが終末の時を待っている間に、すべての人々に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、隣人愛の奉仕を行うことがキリスト者に求められる」と言うのです。

この世には、様々な問題に満ちあふれています。戦争、飢餓、自然破壊、孤独……、一つひとつの問題を解決するために私たちは努力しなければなりません。しかし、すべてが直ぐに解決できるわけではありません。私たちの前に、苦しむ人たち、悲しむ人たち、重荷を負う人たちが現実に存在します。私たち自身も、苦しみ、悲しみ、重荷を負うことがあります。互いに自己主張を行い、自分が認められることを要求し始めると、対立はエスカレートします。互いに重荷を担い合い、自らの重荷を担うことで責任を果たしたなら、結果として、相手を活かすことになるのです。イエスは私たちに対する愛のゆえに、私たちの重荷を負ってくれます。そのイエスと共に歩む時に、私たちは、お互いに重荷を担い合うことができるようになります。自分ひとりで苦しむのではなく、共に声をかけあい、共に力を合わせ、共に支え合うことによって、私たちは、重荷を軽くすることができます。そのように力を合わせ、共に生きようとするところにインマヌエル、イエスがいます。